



橋本コレクション

The Hashimoto Collection

来歴 / Provenance: 橋本貫志氏寄贈、2012年

展覧会歴 / Exhibitions: 「指輪」東京都庭園美術館、2000年6月7日-8月6日(指輪を中心に約400点出品); 「指輪」箱根ガラスの森美術館、2008年4月20日-10月31日(指輪74点出品); 「橋本貫志コレクション」ミキモト本店、2011年5月13日-5月29日(指輪60点出品)

文献 / Literature: Diana Scarisbrick, *Historic Rings: Four Thousand Years of Craftsmanship*, Tokyo, New York, London, 2004; 宝官優夫・諏訪恭一監修『指輪88』淡交社、2011年

2012年夏、指輪を中心とする工芸品コレクションが橋本貫志氏(1924-)によって寄贈された。この「橋本コレクション」は、指輪732点、指輪とセットになっている腕輪やネックレス、石など71点、指輪のデザイン画2点、指輪に関する書籍1点の全806点で構成されている。橋本氏は日本と東洋美術の収集家として知られ、コレクションを東京国立博物館や東京藝術大学大学美術館などに寄贈してき

たが、1989年から2002年にわたり、おもにオークションによって指輪を集中的に収集した。橋本氏によれば、コレクションとは「日本の公共美術館あるいは博物館にコレクションをそっくり寄贈」^{註1)}することで完成するものであり、その高邁な精神によってこのたび、当館に橋本コレクションがもたらされることとなった。

収集された指輪の制作年代は古代から現代に及び、制作地も欧米だけでなくアジア、ラテンアメリカまで含まれている。作品の素材、技法、用途、形式にも偏りが無い。こうしたコレクションの多様性によって、「コレクターの喜びは、ものを冷静かつ客観的に見極め、文化的に意味がある集合体を新しく創造することにある」^{註2)}という橋本氏の言葉どおり、コレクション自体が歴史の語り手となる。指輪というひとつの Kategorie で、ここまで広範に集められたコレクションは、世界的に見てもめずらしい。

これまでの国立西洋美術館の所蔵品の主体は中世末期から20世紀初頭までの絵画や彫刻であるため、橋本コレクションは当館初のもつまった工芸品コレクションである。所蔵作品の年代に関しても、

古代と現代という新しい時代が加わった。地域も上述のとおり、西洋以外の文化圏が含まれている。未知の時代、地域、分野へと足を踏み入れることは容易ではないが、新旧コレクションの相互作用によって西洋文化の新たな魅力を提示するチャンスとして捉えたい。

以下、年代に基づきながら、橋本コレクションの代表的な作品を紹介する。^{註3)}なお、文中の記号(例:0SL088など)は橋本氏の採番による。

橋本コレクションの古代部門の中核は、エジプト、ギリシャ、エトルリア、ローマの地中海文化圏に属する約100点の指輪である。指輪の歴史の初期の段階では、指輪は装飾品ではなく身の安全を祈願する護符として、あるいは実用的な印章として用いられた。0SL088は、古代エジプトの典型的な護符のひとつスカラベである。スカラベを表わす硬いアメシストに穴を貫通させ、そこに金線を通してフープを形作っている。このスカラベには刻銘がないが、滑石製の3SL251-1のスカラベの腹の部分にはエジプトの最高神アメン=ラーを表わすヒエログリフが彫られ、この指輪が印章としても使用されていたことがわかる。

古代ギリシャでは紀元前6世紀にベゼルに装飾を施した金・銀の指輪の製作が本格的に始まり、紀元前5世紀半ばには意匠を施した宝石付きの指輪も見られるようになる。橋本コレクションのギリシャ作品のほとんどは、さらに時代の下るヘレニズム時代に属しているが、2SL189はクラシック時代の数少ない作品のひとつで、青いガラス製の回転式ベゼルの上に飛翔する勝利の女神ニケが金箔で表わされている。ヘレニズム時代に入ると、1CL163のようにさまざまな図像を彫り込んだ宝石が繰り返し指輪に用いられるようになる。このアメシストのインタリオには、魅惑的な歌声でオデュッセウスを惑わすセイレンがリュラの楽器とともに三重で描かれており、図像として非常にめずらしい。

エトルリア人はまずオリエント美術の影響を受け、やがてギリシャ美術、とりわけアルカイック美術に魅了される。その様子は東方起源のロゼッタ文様で飾られた2CL183に垣間見ることができる。エトルリア美術の最盛期は早くも紀元前7世紀の後半に始まり、すでにこの時期に、エトルリア人は精緻を極めた粒金細工と金線細工の技法をマスターしていた。その伝統的至芸は、4CL264の菱形の金のベゼルの縁取りに見て取ることができる。

橋本コレクションの古代ローマ時代の作品は、人々が盛んに宝飾品を用いるようになる帝政期に属するものがほとんどである。ローマはエジプトを征服して大帝國を築き上げるが、金の指輪2SL187のルビーのインタリオには、エジプトの神とローマの神が融合した姿が描き出されている。ローマでは層状の縞模様を活かしたカメオに優れた作品が見られるが、本コレクションにも縞瑪瑙の素晴らしいカメオの指輪9CL020がある。幅わずか1 cm 余りの石の上に、生け贅を捧げる情景がまるで劇場の舞台であるかのように繰り広げられている。さらに本コレクションには、古代と現代が融合したユニークな作品も見られる。金の指輪3CS212は、宝飾品メーカーのブルガリが古代ローマのブロンズの硬貨を利用して現代のジュエリーに仕立てたものである。この作品から、考古的な遺物を指輪という新しいコンテクストに置くことによって生ずる一種の化学変化を感じ取ることができるだろう。

古代文明が滅亡しても指輪は消滅しなかったことが、本コレクションに伝わる50点以上の中世の指輪から実感できる。中世前半の作例(4CL267, 5CL341など)の特徴は、シンプルなフープ、高いベゼル、色彩豊かな大ぶりの宝石である。中でも3CL241は、アーチで構成された立方体のベゼルがドーム形のカポションのエメラルドを戴き、ビザンチンの大聖堂のような外観を呈している。中世には宝石はカットされなかったため、この作品のように、光の反射ではなく石そのものの華やかな色によって指輪の美しさが強調された。

12世紀以降になると、ふたつの典型的なデザインが現われた。ひとつは、2CL173のように、フープから連続的にベゼルが山形にせり上がり、その頂上に小ぶりの石を載せたタイプで、全体があぶみの形に似ていることから「あぶみ型」と呼ばれる指輪である。もうひとつは、大ぶりの石が方形または楕円のベゼルで囲まれた指輪で、「パイ皿型」と呼ばれている(たとえば6SL444)。

印章指輪は中世になっても廃れなかったが、硬い宝石を彫り込むインタリオの技術はほとんど失われたため、5CL418に見られるように、金属製のベゼルに図像を彫った。中世に現われた特徴的な印章指輪のひとつは楕形で表わされた紋章で(5SL302)、中世後期に王侯貴族のあいだで紋章が流布したことを反映している。

指輪が愛の証として欠かせない存在であったことは、中世でも変わらなかった。大切な人への思いの丈は、心のこもった言葉を通じて、あるいは象徴的な形によって指輪に託された。愛のメッセージは、当時、恋する人の言語と見なされていたフランス語で刻まれていた(7SL550)。また9CL022は、互いに握り合う手をフープに表わした結婚指輪の作例で、中世以降も長いあいだ流行したタイプである。これは「フェデリング」と呼ばれる指輪で、古代ローマ時代、婚礼の儀式でふたりが互いに右手を握り合った(*dextrarum iunctio*)ことに由来している。

古代において重要な役割であった護符としての機能は中世でも引き継がれ、指輪の宝石や刻銘が人知を超えた力をもつと信じられた。本コレクションの興味深い作例(7SL510)では、腎臓病に効き、新生児を守ると思われたトードストーン——ヒキガエル(トード)の頭から採れると信じられていたが実際は魚の歯の化石——がベゼルの載り、さらにフープにはてんかんの発作を予防すると見なされた東方の三博士(メルキオール、カスパール、バルタザール)の名が刻まれ、指輪にすぎず持ち主の心情が察せられる。

鍍金されたブロンズに水晶をあしらった4CL273は、教皇パウルス2世(在位1464-71年)の名が刻まれた「パパールリング」である。5 cm 以上にも達する指輪の高さが、教皇の権威の大きさを如実に物語っている。ショルダー部分には四福音史家、フランス王家、パウルス2世の紋章が施され、指輪にさらなる威厳を与えている。

ルネサンス時代の指輪は、いわば工芸技術の粋を集めた小世界だった。7SL509のベゼルの載るピラミッドのようなダイヤモンドは、15世紀に登場したポイントカットの加工技術を用いている。フィレンツェに君臨したメディチ家の紋章は、この種の簡素なダイヤの指輪を基にしてデザインされた。宝石はルネサンス時代にも珍重されたが、9CL026が示すように、彫金とエナメル加工技術も主役級の役割を演じていた。渦巻きのモチーフでフープと連結したベゼルは量感溢れる四弁の花びらで形作られ、花卉を飾る赤、緑、白の細やかなエナメルがテーブルカットのダイヤモンドの輝きに彩りを添えている。

印章指輪に関しても、贅を尽くしたルネサンスの逸品が橋本コレクションに含まれている。印章の文字や図柄は刻印しやすい金属に表わされることが多いが、4CL275は硬い水晶を陰刻し、さらに石の底に色付けされた金箔を敷いたためずらしい作例である。色彩によってHWのイニシャルと図柄が浮かび上がると同時に、1592という金箔で表わされた年号が透けて見える。

愛の言葉を添えたポーズリング、握り合う手を象ったフェデリングはルネサンス時代にも依然として人気を博したが、愛するふたりの絆をひしひしと感じる新たなタイプの指輪が登場する。8SN582は一眼するとひとつのフェデリングだが、実際は、鎖のように分かちがたく連なったふたつのリングが握手をするように組み合わせられたギメルリングである（ギメルは双子を意味するラテン語に由来）。さらにそれぞれのフープには「愛は勝つ」「死ぬまで一心同体」というオランダ語の銘が刻まれ、絶対に離れないというふたりの意志が表明されている。

古代ギリシャ・ローマ世界に直に通じるルネサンスならではの指輪も、本コレクションに見出すことができる。4CL274では、西洋美術に無尽蔵の主題を提供するギリシャ神話が、金と鉄の小さなベゼルの中にミニアチュールのごとく彫り出されている。裸体のレダに寄り添う白鳥は変身したゼウスで、レダに口づけするかのような白鳥のしぐさは、ミケランジェロの失われた絵画《レダと白鳥》に類似する。一方、幅広のフープには、愛の女神ウェヌスと戦いの神マルスが表わされている。マルスとウェヌスの愛の場面は、ポンペイの壁画に頻りに描かれていることから明らかのように、古代ローマで広く普及した神話主題だった。

聖書主題も、神話と並んで重要な題材のひとつだった。本コレクションでは、受胎告知の場面を表わしたルビーのカメオ（9CL003）とキリストの横顔を表わしたエメラルドのカメオ（9CL010）が目目に値する。これらの指輪は、当時モノクロームの貴石によるカメオ製作が盛んだったヴェネツィアで作られたものである。

ダイヤモンドを一粒だけ戴く金のソリテア（単石）リング5SL408は、ルネサンス期とは一線を画す17世紀の指輪の特徴を示している。このダイヤには数多くのファセット（切子面）が付けられているため従来よりも輝きが増しているが、17世紀初頭に生み出されたこのローズカットの技術によってダイヤモンドが宝石の主役となると同時に、彫金やエナメルの技術が二次的なものとなったのである。さらにありのままのダイヤの輝きを求めた結果、17世紀の終わり頃には、黄色い光を反射する金の台枠の代わりに銀を用いるようになる（6SL445）。しかし実際には大粒の石は入手が難しく、小さな石をちりばめたクラスターリングが数多く作られた。9CL029のように、中心の石の両脇に3つずつ石を並べた計7粒からなる組み合わせは、クラスターリングの典型である。

カメオとインタリオも、卓越した技術に裏打ちされたルネサンス作品の質には及ばないものの、17世紀に根強い人気があったことが、海の怪物ヒッポカンポスにまたがるネレイス（9CL030）を表わすインタリオや、聖母マリアの横顔を彫った瑪瑙のカメオ（9CL012）から窺い知れる。

一方、印章指輪の流行は17世紀に下火になった。当時、印章は指にはめる代わりに腰からぶら下げることが多くなったためである。しかし、王侯貴族のあいだでは継続して伝統的な指輪が使用され、たとえば紋章の印章指輪として、イギリスの多くの貴族に採用された鷹の

紋章を刻んだ5CL358が挙げられる。本作品の鷹の足に鈴が付けられていることからわかるように、この種の紋章は、9世紀に大陸から伝わって以降イギリスで非常に愛好されていた鷹狩りを示唆している。

17世紀にはベゼルに小さな収納スペースを設けて香料などを入れたロケットリングが考案され、指輪に新たなアクセサリとしての機能が加わった（たとえば7SL551）。しかし17世紀の指輪を最も特徴づけるのは、メント・モリ（死を思い出せ）の思想による影響だろう。疫病が蔓延し、戦争が長く続いたこの時代、死は人々にとって切実でリアルなものだった。1CL157のフープの上にむき出しにされた頭蓋骨は、「明日は我が身」という警告を発している。5CL359は回転式のベゼルをもち、片側に海賊船がよく見るようなドクロのマークとメント・モリの銘が刻まれ、反対側にコカトリス—雄鶏が産み落とし蛇が温めた卵からかえったとされる怪物—が表わされている。伝承によれば、コカトリスが触れた植物は枯れ、人間はそれを一瞥するだけで毒が回り死に至ったという。生きる人間に対する戒めであるメント・モリの思想は、やがて死んだ人間に対する追憶へとつながっていく。7CL525に嵌め込まれたミニアチュールには、清教徒革命で処刑された国王チャールズ1世が描かれている。アンソニー・ヴァン・ダイクによる肖像画に基づいて作られたこの指輪には、悲運の支配者に対する憧憬とともに、王政を支持する政治的な意味合いも込められているのだろう。

愛の象徴であるフェデリングは、17世紀にも流行した（2CL197）。5SL411は、お互いの右手でルビーとダイヤモンドのハートを支える意匠を凝らしたギメルリングであるが、この指輪がユニークなのは、リングを開くとそれぞれの石の下に骸骨の像が現われることである。メント・モリが愛の指輪にも忍び込んでいて、いかにも17世紀らしい。一方、2CL198はきわめて簡素な外見だが、内側には一部の言葉を図柄で表わした独特な方法で愛の銘文が刻まれている。本作品のようなベゼルをもたないポーズリング（posy ring）が、永遠の愛のシンボルである「輪」の形そのものであるという理由で好まれたことも、17世紀の新たな傾向のひとつだった。

ルビーとダイヤモンドを巧みに配して昆虫を象った0CL115は、18世紀のロココ趣味を反映している。この時代には、花、小枝、鳥などの自然のモチーフが宝飾品に盛んに取り入れられた。18世紀後半になると、新古典主義の影響を受けて大振りでシンメトリカルな形をしたベゼルが普及する。5CN320は、新たに人気を博したボート形のベゼルに従来のロココ的な花のモチーフを取り込んだ過渡的な作例である。大粒のダイヤモンドの回りに数え切れないほどの小さなダイヤをちりばめた2SG207は、18世紀のダイヤモンドの宝飾品がほとんど失われている中、この時代が「ダイヤの時代」だったことを知らしめている。

ミニアチュールを嵌め込んだ指輪は、ゲーテをはじめとする18世紀の文学作品でしばしば言及されていることからわかるように、この時代に人気の絶頂を迎えた。本コレクションの作例としては、ドイツ人画家アントン・ラファエル・メンクス（1728–1779）による自画像のミニアチュールが特筆に値する（0CL109）。メンクスの精緻な肖像もさることながら、この指輪に刻まれた所有者の銘の中に、ラファエル前派の画家ウィリアム・ホルマン・ハントの名があることも注目される。

ベゼルが大型化したことを受け、愛にまつわる場面を描いたミニアチュールも多く作られた。7SL483は、祭壇で愛の女神ウェヌスの聖鳥

である鳩を捧げる麗しい女性が縦長の八角形のベゼルに描かれている。祭壇に向かって青空から舞い降りる有翼のクビドが愛らしい。

5CL362は、イングランド王エドワード4世(1441-1483)の頭髪がベゼルに取められた歴史的な指輪である。埋葬から約300年後の18世紀末に墓が偶然発見された際、亡骸の頭にはまだ長い髪の毛が残っていた。本作品で目にしているのは、発見後に持ち出されたその遺髪の一部である。

18世紀半ばのポンペイとヘルクラネウムの発見で巻き起こった古代ブームにより、古典的 주제に基づいたカメオとインタリオの製作が活発になった。9CL036はギリシャの女神アテナを表わしたカメオで、女神の兜にはロレンツォ・デ・メディチ(1449-1492)の名がラテン語で刻まれている。この銘はメディチ家のコレクションであることを示すが、本作品はオリジナルのメディチ家のカメオを18世紀にコピーしたものである。オリジナルはアウグストゥス時代のカメオで、現在、フィレンツェ考古学博物館に収蔵されている。

新古典主義で好まれた縦方向に長く伸びるベゼルとは対照的に、19世紀初めには横軸を強調したスタイルが広まった。ダイヤモンドが3列平行に並べられたフープリング5SL335はその典型である。19世紀の終わりになると、4CN261のようなフープの半分または全体に石をセットしたタイプが標準的となった。その一方で、さまざまな過去のデザインが復活したのも19世紀の特徴のひとつである。フランス第二帝政期には革命前の18世紀様式が好まれ、ロマン主義文学に感化を受けた人々のあいだでは5SL336のような中世・ルネサンス風の指輪が享受された。さらに、剣と十字架を持つ2体の天使の立像がフープを飾る9SL041は、ゴシック建築の意匠である四つ葉形のベゼルをもつ。きわめて彫刻的な本作品は、ゴシック・リバイバルの一例である。

18世紀以降、イタリア半島の遺跡で出土した宝飾品のイミテーションが数多く作られたが、フォルトゥナート・ピオ・カステッラーニ(1794-1865)がエトルリアの金細工を模倣・アレンジした作品は、古代復活のシンボルとして一世を風靡した。カステッラーニの成功を受けて同様の模造品を作る工房がローマやナポリに現われたが、その工房ひとつがザルタ・モラビート製の豪華な装身具一式が本コレクションに含まれている(5SN303'-A ~ 5SN303'-D)。また、4SL288'も古代の金工技術を模倣したプレスレットで、各メダルにはサン・ピエトロ大聖堂やコロッセウムなどのローマの名所旧跡がガラスモザイクで表わされている。このような装身具は、グラント・ツァーでイタリアを訪れた旅行者の格好のお土産だった。

メモリアルリングは19世紀においても重要な位置を占めた。緑色のエナメル地に忘れな草や薔薇が彫金された幅広のフープリング4CL280は、本コレクションで最も歴史ゆかしいメモリアルリングのひとつである。フープには小さな扉が付いていて、その下のわずかなスペースに髪の毛が取められている。指輪のオリジナルのケースには、蓋の上にM.A.のモノグラムが印され、内側のプレートには「王妃の髪」という銘が刻まれていることから、本作品がフランス王妃マリー=アメリー(1782-1866)に由来することがわかる。マリー=アメリーは家族や親しい友人に自分の髪を入れた指輪を贈っていたことが知られているため、遺髪は彼女自身のものである可能性が高いが、他方、叔母のマリー=アントワネット王妃(1755-1793)の頭髪であるとする説も唱えられている。

19世紀、印章指輪の本来の機能は薄れつつあったが、7CL531から、印章指輪が紳士の証として大切な役割を担っていたことがわかる。トパーズにインタリオで表わされた横たわる女性像は、ミケランジェロが制作したメディチ家の墓廟を飾る彫刻のひとつ《夜》を模倣している。そしてインタリオが嵌め込まれたベゼルは、墓廟の棺を忠実に再現している。この指輪はフランス製だが、メディチ家の墓は、当時、とりわけフランス人たちのあいだで称賛されていた。

19世紀末から20世紀初頭にかけてヨーロッパで広まったアーツ・アンド・クラフツ、アール・ヌーヴォー、アール・デコは、宝飾品の世界を大きく変えた。橋本コレクションはこの新たな装飾美術運動で生み出された作品を数多く有し、その中には当時を代表する作家の作品も含まれている。6NT432'は、象や魚のモチーフでデザインした指輪を描いたルネ・ラリック(1860-1945)自身による素描で、ラリックの制作プロセスの一端を示す貴重な資料である。プリカジュールの技法を用いて透明感溢れるエナメルの葉を2枚真珠の両脇にあしらった2CG209は、対称的な構成の中で柔らかなエナメルのデザインが際立ったラリックの作品である。本コレクションに帰属するアール・ヌーヴォー作品の重要な作者としてはほかに、リュシアン・ガイヤール(1861-1933)やジョルジュ・フーケ(1862-1957)を挙げることができる。

第一次世界大戦の頃に始まり、1925年のパリの国際博覧会で開花したアール・デコは、アール・ヌーヴォーとは対照的に、直線に基づく幾何学的モチーフでデザインされる。3粒の色付きのダイヤモンドを八角形のベゼルが囲む5SL297は、指輪の幾何学性がダイヤの色彩によって強調されている。つまり、ベゼルの中心軸上に並ぶダイヤには、中央が黄色、両端がオレンジ色という対称的な配色がなされているのである。

5TL328は、産業革命の機械による大量生産の向こうを張って、中世の手工芸の技を制作のよりどころとしたアーツ・アンド・クラフツの作例である。作者はリパティ社の優れたデザイナーのひとりジェシー・キング(1875-1949)で、トルマリンをぐるりと取り巻く小枝のデザインにはぬくもりが感じられる。

こうした新たな時代の潮流とは別に、石の素材そのものに価値を置き、伝統的なデザインにこだわった指輪も根強い人気があった。大振りのダイヤモンドを中心に小振りのダイヤをふんだんにちりばめた8SN603のプラチナのベゼルは、フランス革命以前の18世紀に流行したボート形のベゼルを再現している。フランスの老舗宝飾品メーカーであるショーメやカルティエは長く培われてきた指輪作りの伝統を重んじたが、本コレクションでは、かつちりと構成されたアール・デコのカルティエの作例を見出すことができる(5SL337)。

第二次世界大戦の頃になると、ニューヨークの宝飾品メーカーが台頭するようになる。5SS294はマディソン街に店を構えたランバート・プロスの作品で、この種の宝石が山のように積み上がったドーム形のカクテルリングは、隆盛を極めた50年代のアメリカでとりわけ好まれた。現代の一流ブランドであるブルガリは、早くも19世紀末にローマのコンドッティ通りに店をかまえ、前述の3CS212の例のように、古代ローマの基礎の上にルネサンスやバロック芸術が積み重なる都ローマならではの作品を制作した。

橋本コレクションの戦後の作品で目を引くのは、キュビズムの代表的画家ジョルジュ・ブラック(1882-1963)の素描に基づいて制作さ

れた指輪2CL202で、オデュッセイアに登場する魔女キルケーを表わしている。また、8SL573はモビールの彫刻で知られるアレクサンダー・カルダー（1898–1976）の作品で、1本の真ちゅうの針金を曲げて作られた8つのループからなるこの指輪は、彼の制作活動の原点となった一筆描きの針金彫刻に直に結びついている。

本稿の最後に紹介するのは、橋本氏が好んだ現代作家ウエンディ・ラムショウ（1939–）による他に類を見ない装身具一式である（5WL420～5WL425'）。ネックレス、イヤリング、4組のリングからなるジュエリーセットは、白銀やジルコニウム製の同心円、半円、渦巻き、扇形、三角形等さまざまな幾何学模様を組み合わせて形作られている。しかもイヤリングと指輪は、まるで展示台であるかのような透明なアクリル樹脂のスタンドによって支えられている。従来の装身具の枠組みを超えたこれらの作品は、むしろインスタレーションとして捉えるのが妥当かもしれない。

以上、作品全体からするとわずかな部分の記述にすぎないが、橋本コレクションの多様性によって、当館既存の作品との接点を少なからず見出すことができるだろう。また、本コレクションは西洋美術史全体の理解を深めるさまざまな切り口を提供できるのではないだろうか。そのような橋本コレクションに潜在する可能性を存分に引き出すことが、これから当館が果たすべき重大な務めである。（飯塚 隆）

註

- 1) 橋本貫志「指輪に絆されて」宝官優夫・諏訪恭一監修『指輪88』淡交社、2011年、p. 5。
- 2) 同書、p. 4。
- 3) 本稿はおもに以下の文献を参考にした。Diana Scarisbrick, *Historic Rings, Four Thousand Years of Craftsmanship*, Tokyo, New York, London 2004.

During the summer of 2012, Mr. Kanshi Hashimoto (b. 1924) donated his jewelry collection, primarily rings, to the NMWA. The Hashimoto Collection consists of 806 objects, including 732 rings, 71 bracelets, necklaces, and unmounted stones that form sets with rings, 2 designs for rings and one book about rings. Mr. Hashimoto is a renowned collector of Japanese and Asian art, and he has previously presented parts of his collection to the Tokyo National Museum and The University Museum, Tokyo University of the Arts. From 1989 through 2002 he assembled a collection of rings, primarily from auctions. According to Mr. Hashimoto, “I want to donate my entire collection to public art museums or museums in Japan.”¹⁾ This generosity of spirit led to this particular donation to the NMWA.

The rings in the collection date from antiquity to the present day, with their production sites ranging from Europe to Asia and Latin America. There is also endless variety in the materials, methods, uses and forms of the works. Regarding the diversity of the collection, to quote Mr. Hashimoto, “The collector’s joy lies in coolly and objectively observing a work, and building a new collection that has cultural meaning,”²⁾ indicating that the collection itself speaks of history. A collection of rings of this breadth and scope is rare worldwide. The NMWA collection has historically focused on paintings and sculptures from the late medieval period through the beginning of the 20th century. The Hashimoto Collection is the museum’s first collection focusing on decorative arts. Concerning object period, these works also bring new eras to the NMWA collection in terms of both antiquity and contemporary eras.

Geographically, the collection breadth includes areas outside of Western Europe. While it is not easy to expand into areas, periods and genres with which we are unfamiliar, this addition to the collection provides a chance to reveal new areas of fascination in Western culture through the interactions and combined use of old and new collection materials alike.

The following is a chronological introduction to the major works in the Hashimoto Collection.³⁾ The numbering system used in this text (ex. 0SL088) is the numbering system established by Mr. Hashimoto.

The core of the ancient section of the Hashimoto Collection consists of approximately 100 rings from such ancient Mediterranean civilizations as Egypt, Greece, Etruria, and Rome. During the first phase of the history of rings, they were not used as personal adornment, but rather as a talisman protecting their wearer, or they contained seals for signatory use. 0SL088 is a scarab, a typical form of protective talisman in ancient Egypt. A hole was cut in the hard amethyst forming the scarab and a hoop made of gold wires attached through the hole. This ring was not used as a seal because it bears no inscription. Another scarab (3SL251-1), on the other hand, bears a hieroglyph for Amun-Ra, the highest deity in the Egyptian pantheon, inscribed on the torso of its steatite scarab, indicating that it was used as a seal.

The full-scale production and use of gold and silver rings with decorated bezels began in the 6th century B.C. in Greece, and by the middle of the 5th century B.C., rings can be found with inset jewels. The majority of the Greek rings in the Hashimoto Collection date later, to the Hellenistic period, with 2SL189 a rare example of a ring from the Classical period. This swivel bezel set with blue glass is decorated with a gold leaf image of a flying Nike, the goddess of victory. The beginning of the Hellenistic period, as seen in 1CL163, saw the development of rings with the frequent use of stones carved with various motifs. There is an amethyst with intaglio carving of a motif that is extremely rare, namely three lute-playing sirens, who captivated Odysseus with their seductive sounds.

Etruscans were influenced by Oriental art, and eventually were fascinated by Greek art, specifically that of the Archaic period. This trend can be glimpsed in 2CL183, with its rosette design that originated in the Orient. At the earliest, the height of Etruscan art came in the latter half of the 7th century B.C., and by that period Etruscans had already become masters at gold granulation and filigree. These traditional arts can be seen in the edging on the diamond-shaped gold bezel of 4CL264.

The majority of the Hashimoto Collection works dating to the ancient Roman era fall into the Imperial period when people wore a large amount of jewelry. Rome conquered Egypt and set out to build a great empire, and the ruby intaglio on the gold ring 2SL187 shows a fusion of Egyptian and Roman gods. There are many Roman examples of cameos making use of a stone’s striped layers, and the Hashimoto Collection includes 9CL020, a superb sardonyx cameo ring. The stone is no more than 1 cm in width, but it presents a dramatic scene of a sacrificial offering. There is also a work in this collection that presents a unique fusion of the ancient and the contemporary. The gold ring 3CS212 is a contemporary piece by the jeweler Bulgari that incorporates an ancient Roman bronze coin. In this work we can sense a type of chemical change, as an archaeological artifact is placed in the new context of the ring.

Even as ancient civilization declined, rings did not disappear, as witnessed by the more than 50 medieval rings in the Hashimoto Collection. The characteristics of the rings from the first half of the medieval period (such as 4CL267 and 5CL341) include simple hoops, high bezels and large, colorful stones. Ring 3CL241 has an arching bezel set with a dome-shaped emerald cabochon, presenting an external view similar to that of a Byzantine cathedral. Stones used in jewelry were

not faceted during the medieval period, and as seen in this work, the emphasis was on creating a beautiful ring through the vivid color of the stone itself, not its light reflecting qualities.

From the 12th century onwards, two now typical designs began to appear. One, as seen in 2CL173, shows a tall bezel rising linearly from the hoop, and a small stone set into the peak. Overall these rings resemble stirrups, and hence they came to be known as stirrup rings. The other typical shape consists of rings with a large stone surrounded by either a square or oval bezel, known as a pie-dish type ring (for example, 6SL444).

While seal rings did not completely disappear with the advent of the medieval period, given that the technology required to carve intaglio designs on hard stones was essentially lost, these seal rings shifted to a design carved into a gold bezel as seen in 5CL418. One of the characteristic seal rings that appeared in the medieval period was the family crest shown on a shield-shaped bezel, as seen in 5SL302, reflecting the fact that in the late medieval period, the use of crests spread amongst the aristocracy and rulers of the day.

The use of rings as a symbol of love did not diminish in the medieval period. Thoughts about a special person were entrusted to rings in the form of special words engraved on the ring or a symbolic shape. On 7SL550, words of love are engraved in French, the language of love. Ring 9CL022 is an example of a wedding ring with clasped hands shown on the hoop, a style that has long been fashionable since the medieval period. This ring is known as a fede ring, a ring that derives from the “*dextrarum iunctio*” of two people clasping their right hands during an ancient Roman wedding ceremony.

The ancient function of rings as a protective talisman also continued into the medieval period, when it was believed that the gems in a ring or its inscription possessed mystical powers. A fascinating example in this collection, (7SL510), includes a toadstone, a fossilized fish tooth that was believed to come from a toad’s head, and was believed to be effective against kidney disease and to protect newborn infants. The stone is set into the bezel, with the names of the three wise men of the East (Melchior, Caspar and Balthazar) thought to ward against epilepsy, thus reflecting the owner’s wishes.

Ring 4CL273 is a papal ring made of cast bronze and crystal and is inscribed with the name of Pope Paul II (r. 1464–1471). This extremely tall ring, measuring more than 5 cm in height, speaks of the massive authority of the pope. The Four Evangelists are depicted on the shoulder of the ring, along with the crests of the French royal family and Paul II himself, further increasing the majesty of the work.

Rings made in the Renaissance present a miniature realm of the pinnacle of decorative arts technology. The pyramid-like diamond set into the bezel of 7SL509 was produced using the point cut technology developed in the 15th century. The crest of the Medici family, rulers of Florence, was designed on the basis of this type of simple diamond ring. Jewels were prized in the Renaissance and, as seen in 9CL026, engraving and enamel work also played a major role in ring design. A bezel linked to the hoop through a coiling motif was created in the form of four, volumetric flower petals, while intricately worked red, green and white enamel adds color to the sparkle of a table-cut diamond.

Superb examples of Renaissance luxury in the form of seal rings can also be found in the Hashimoto Collection. While many of these works have their inscribed lettering and designs worked in easily carved gold, 4CL275 is an unusual work with its inscription carved in intaglio on hard rock crystal and a colored metal foil sheet placed beneath the stone. Thanks to the color, the initials HW and the image appear in the stone, and the date 1592 appears in metal leaf.

Posy rings for expressing words of love and fede rings with their clasped hands maintained their popularity in the Renaissance, but another new type of ring appeared that fully conveys the bond between two lovers. While at first glance 8SN582 appears to be a fede ring, it is in fact a gimmel ring in which two rings, like links in a chain, are combined as if clasping hands. The term gimmel derives from the Latin word for twin. The two hoops are also engraved with the Dutch phrases that means “love conquers all” and “bound tight in marriage until death,” fully expressing the will of the two inseparable people.

There are also rings in the collection that are from the Renaissance but link directly back to ancient Greece and Rome. Greek mythology has provided an inexhaustible trove of subjects for art in the West, and on 4CL274, the imagery is carved in miniature form on small gold and iron bezels. The swan ravishing the nude Leda is Zeus in disguise, and the pose of the swan, as if attempting to kiss Leda, resembles that of the lost Michelangelo painting of Leda and the Swan. On the other hand, Venus the goddess of love and Mars the god of war are shown on the broad hoop. As shown by its frequent use on the wall paintings at Pompeii, the love scene between Mars and Venus was a mythological subject widely used in ancient Rome.

Along with mythological subjects, biblical subjects were also an important source for ring decoration. The Hashimoto Collection features 9CL003 with a ruby cameo showing the Annunciation, and 9CL010, an emerald cameo, showing Christ in profile. These rings were made in Venice, where cameo production from monochrome gemstones flourished at the time.

A single diamond set in a ring is known as a solitaire ring, and 5SL408 shows the characteristics of such rings from the 17th century that differ from those of the Renaissance. The facets on this diamond make it sparkle, but thanks to the rose cut technology developed at the beginning of the 17th century, the diamond becomes the focal point, and engraving and enamel technologies became secondary. The search for the sparkle of the diamond itself meant that by around the end of the 17th century, silver was used as a base, rather than gold that reflected a yellow light (6SL445). And yet large diamonds were hard to obtain, and thus there were many cluster rings made in which numerous small stones were imbedded in the bezel. As seen in 9CL029, a typical cluster ring is decorated with a group of seven stones, with two sets of three stones flanking a central stone.

While not with the superb craftsmanship that underscored their Renaissance counterparts, cameo and intaglio forms remained solidly popular in the 17th century, as can be seen in the intaglio showing a Nereid sea nymph fighting the sea monster hippocampus (9CL030) and the agate cameo with a profile view of the Madonna (9CL012).

On the other hand, the 17th century saw a waning of the interest in seal rings. At the time, rather than a seal on a ring, the custom changed to hanging the seal on a chain from the waist. However, the traditional use of seal rings continued amongst the royalty and aristocracy, as seen in 5CL358 with its carved hawk crest that was frequently used by English aristocrats. As indicated by the fact that the hawk seen here has a bell attached to its leg, this type of seal suggests hawking, a sport that was greatly beloved in England since it was brought from the continent in the 9th century.

During the 17th century locket rings with small storage spaces cut into the bezel to hold perfume or other liquids became popular, thus adding a function to rings as a new type of accessory (for example, see 7SL551). However, the most characteristic factor of 17th century rings can be seen in the influence of the *memento mori* philosophy. During this time of rampant diseases and long-lasting wars, death was a reality faced by many. The skull that protrudes from the hoop of 1CL157 carries

the warning “tomorrow this will be me.” 5CL359 has a swivel bezel, with one face inscribed with the motto *memento mori* and the skull and crossbones mark frequently seen on warships, while the other side shows a cockatrice, a two-legged dragon with a rooster’s head that is said to emerge when a hen’s egg is hatched by a snake. According to tradition, the plants touched by a cockatrice wither, and a single touch from the cockatrice will poison and kill a human. The *memento mori* philosophy, with its belief in the sins of mankind, links all to thinking of those who have died. The miniature inset into 7CL525 depicts King Charles I of England who was executed following the English Civil War. This ring based on a portrait painted by Anthony van Dyck is both memorial to the tragic fate of the king, and holds the political meaning of support for the monarchy.

The love token *fede* rings were also popular in the 17th century (2CL197). Ring 5SL411 is a *gimmel* ring with the right hands of the couple holding a diamond and ruby heart. The unique feature of this ring is seen when the ring is opened, with skeletons appearing beneath each of the stones. The inclusion of the *memento mori* concept in a love ring is particularly 17th century in tone. Conversely, 2CL198 has an extremely simple exterior appearance, but its interior is inscribed with a love phrase in the unique method of showing part of the words in images. This *posy* ring, which has no bezel, was popular because the form of the ring itself stood as a symbol of eternal love, one of the new trends to develop in the 17th century.

0CL115, with its cunning depiction of a beetle in ruby and diamond, reflects the Rococo tastes of the 18th century. During this period, jewelry was rich in natural imagery, from flowers to branches and birds. In the latter half of the 18th century, the rise of Neo-Classicism meant the frequent appearance of large, symmetrically shaped bezels. 5CN320 is a transitional piece, incorporating the newly popular *navette*-shaped bezel with the earlier Rococo-style flower motif. 2SG207 has a large diamond surrounded by countless small diamonds, showing how the 18th century was the Age of Diamonds despite the fact that most of the diamond jewelry of the 18th century has been lost.

Rings with inset miniatures are frequently mentioned in 18th century literature by authors such as Goethe, and their popularity reached its zenith during this period. Of special note in the Hashimoto Collection is 0CL109, which is a self-portrait miniature by the German painter Anton Raphael Mengs (1728–1779). In addition to the intricately worked portrait of Mengs, this ring also features the inscribed name of one of its later owners, the Pre-Raphaelite painter William Holman Hunt.

Thanks to enlarged bezels, there are also many cases of miniatures depicting love-related scenes. 7SL483, depicts a beautiful woman offering doves, the sacred bird of Venus the goddess of love, at an altar on its tall octagonal bezel. Winged Cupid flies in the air beyond the altar.

5CL362 is a historically meaningful ring that houses a lock of the hair of the English King Edward IV (1442–1483) in its bezel. When the king’s grave was discovered in the late 18th century, some 300 years after his burial, his long hair remained on his skull. The hair in this ring is part of the hair removed after its discovery.

The antiquities boom set off by the discovery of Pompeii and Herculaneum in the middle of the 18th century meant the active production of *cameo* and *intaglio* works based on classical subjects. 9CL036 has a *cameo* depicting the Greek goddess Athena, with the Latin name of Lorenzo de’ Medici (1449–1492) inscribed on the goddess’ helmet. This inscription indicates that the ring was in the Medici collection, but this ring is an 18th century copy of an original Medici *cameo*. The original *cameo* dates from the Augustan period and is today in the National Archaeological Museum of Florence.

Contrasting with the tall rectangular bezels favored by Neo-Classicism, the use of horizontal bezels spread at the beginning of the 19th century. A typical example of this style can be seen in 5SL335, a hoop ring with its three rows of diamonds. By the end of the 19th century, as seen in 4CN261, the standard form had changed to a ring with either half or the entire hoop set with stones. Conversely, the 19th century was also characterized by a revival of various different past styles. The Second French Empire preferred the pre-revolutionary styles of the 18th century, while people influenced by Romantic literature favored rings from the medieval and Renaissance periods, as seen in 5SL336. Further, 9SL041 has its hoop decorated with standing figures of two angels bearing a sword and a cross, and has a *quatrefoil* bezel reminiscent of Gothic architecture. This extremely sculptural work is an example of Gothic Revival.

From the 18th century onwards, a large number of imitations of jewelry excavated from ruins in Italy were created, and works that copied or rearranged the gold detailing of Etruscan works made by Fortunato Pio Castellani (1794–1865), stand as a symbol of the ancient revival that influenced a generation. Workshops appeared in Rome and Naples that created the same type of copies, capitalizing on Castellani’s success, and the Hashimoto Collection includes one set of sumptuous jewelry made by Casalta-Morabito, in one of these workshops (5SN303’-A–5SN303’-D). 4SL288’ is a bracelet copying ancient gold work, and each of the medals is a glass mosaic depicting such famous Roman sites as the St. Peter’s Cathedral or the Coliseum. This type of jewelry was a favorite souvenir for travelers on the Grand Tour of Europe.

Memorial rings also hold an important place in 19th century rings. 4CL280 is a wide hoop ring with *forget-me-nots* and roses incised on a green enamel ground. This is one of the most historically important memorial rings in the collection. Small doors were set into the hoop, and a piece of hair was stored inside the small space behind the door. The ring’s original case has the monogram M.A. above roses, and the plate on its interior states, “The Queen’s hair,” namely the hair of Queen Marie Amélie of France (1782–1866). Marie Amélie is known to have given pieces of her own hair set into rings to her family and close friends, and thus it is highly likely that this hair is actually hers, though there is also the theory that the hair is from her aunt Marie Antoinette (1755–1793).

By the 19th century the original function of seal rings had lessened, but as seen in 7CL531, the seal ring still continued to play an important role as a symbol of a gentleman’s stature. A female figure seen in profile on a topaz *intaglio* ring copies the Night figure, one of the sculptures adorning the Medici tombs created by Michelangelo. The bezel with *inlaid intaglio* is a faithful reproduction of the tomb’s sarcophagus. This ring was made in France, indicating that the French of the day admired the Medici tombs.

The late 19th to early 20th century art movements that spread through Europe—Arts and Crafts, Art Nouveau and Art Deco—transformed the world of jewelry. The Hashimoto Collection includes numerous rings created by these new decorative art movements, with some works by the major artists of the day. 6NT432’ is an important example of one aspect of the Lalique design process, with its elephant and fish motifs based on designs by René Lalique (1860–1945) himself. 2CG209 has a pearl flanked on both sides by two enamel leaves rendered in *plique-à-jour* technique to create a transparent feel, and this Lalique work features a soft enamel design amidst the symmetrical composition. Other important Art Nouveau artists in the collection include Lucien Gaillard (1861–1933), and Georges Fouquet (1862–1957).

Art Deco, which began around the time of the First World War and fully blossomed during the World Exposition in Paris in 1925, was

antithetical to Art Nouveau, featuring geometric designs based on straight lines. 5SL297 has an octagonal bezel set with three colored diamonds, with the geometric quality of the ring heightened by the color of the diamonds. In other words, the diamonds aligned along the central axis of the bezel, the central diamond is yellow with the two flanking diamonds orange to create a symmetrical color arrangement.

5TL328 is an example of an Arts and Crafts ring, designed with medieval handwork techniques to contrast with the trend towards machine made mass production after the Industrial Revolution. The designer of the ring, Jessie Marion King (1875–1949), was one of the top designers at Liberty & Co., and there is a sense of warmth in the small branches encircling the tourmaline design.

Other than these new trends of the day, there was also a deep-rooted popularity for rings featuring traditional designs with an emphasis on the quality of the stone itself. 8SN603 features a platinum bezel inset with a large diamond surrounded by small diamonds, which is a recreation of the navette-shaped bezel fashionable in pre-revolutionary 18th century France. The major French jewelry houses, Chaumet and Cartier, emphasized the long traditions of ring making, but this collection features a firmly composed Art Deco work by Cartier (5SL337).

Around the time of World War II, jewelry makers also began to appear in New York. 5SS294 is a work by Lambert Bros., with their shop on Madison Avenue. This type of cocktail ring with its dome shape made up of a mountain-like pile of gemstones, reached its peak of popularity in America during the prosperous 1950s.

Bulgari, one of the top brands today, opened a shop in Rome as early as the end of the 19th century on the Via Condotti. As seen in the previously noted 3CS212, they produced rings that were typically Roman in their layering of Renaissance and Baroque artistic trends onto an ancient Roman basis.

In terms of post-World War II works in the Hashimoto Collection, 2CL202 is a ring made on the basis of a drawing by the major Cubist painter Georges Braque (1882–1963), depicting the witch-goddess Circe who appears in the *Odyssey*. 8SL573 is by the sculptor Alexander Calder (1898–1976), renowned for his mobiles. This ring, featuring a single wire that has been bent into eight loops, is directly linked to his single-brush-stroke wire sculptures that were the starting point of his creative work.

This text concludes with a discussion of the unparalleled set of jewelry (5WL420–5WL425') by Wendy Ramshaw (b. 1939), a contemporary artist favored by Mr. Hashimoto. This set made up of a necklace, earrings and four rings features a combination of various geometric forms made of white gold and zirconium, from concentric circles to semi-circles, coils, fan shapes and triangular shapes. And yet a clear perspex stand supports the earrings and rings, as if on a display stand. This work thus steps beyond the jewelry paradigms of the past and could almost be called an installation work.

The above is just a bare sampling of the overall collection. The very diversity of the Hashimoto Collection will mean the discovery of many points of intersection and comparison with the NMWA's collection. Further this work will provide a starting point for opportunities to deepen the viewer's understanding of the history of Western art as a whole. An important task for the NMWA in the future is to fully elicit the potential of this splendid new collection. (Takashi Iizuka)

Notes

- 1) Hashimoto Kanshi, "Yubiwa ni hodasharete" in *Yubiwa 88 (Historic Rings)*, Kodansha, 2011, p. 5.
- 2) *Ibid.*, p. 4.
- 3) The following book was used as reference for this text. Scarisbrick,